

To the Rising Sophomore

2004 年のスピーチシーズンがほぼ終わった 11 月末、ある一年生の方から『今からスピーチを極めていく上で、まず今から何をすべきでしょうか？』という質問を受けました。質問の重さに驚くと同時に、普通の人ならホッとしている時期にこのような問題意識を育てていることに感心しました。

そこで、これからスピーチを極めようとしている皆さんに何を目指して頂きたいか、どのような点に気をつけて頂きたいか、自分が現役生だったときのことを思い起しつつ書いてみることにしました。

1. 大前提：優勝を目指さねば意味がない！

福澤杯、大隈杯、天野杯、JUEL 杯…大抵のオープン大会では、代々優勝カップが受け継がれます。その年、そのカップを手にできるのは世界でただ一人です。何を当たり前のことを、とお感じになるかもしれません。

そこで、これから競技スピーチを続ける前提として、更に大切なことを肝に銘じて頂きたい。競技スピーチは入賞ではなく「優勝」を目指さなければ意味がありません。

何年も後に『あの大会の Winner』として記憶されるのは、ほとんどの場合優勝者だけなのです。大会当日のパンフレットを見ても、前年以外は優勝者の氏名のみ、または優勝者および準優勝しか記されていないのが通常かと思います。優勝者以外は『誰だったっけ？』程度にしか記憶されないのが通常です。きつい言い方をすれば Also-ran (その他大勢) 扱いです。

大学を卒業して 10 年以上たったこの頃、そのことを特に強く感じます。私は 1994 年から 2000 年まで司法試験に挑戦していたため、競技スピーチの世界から完全に遠ざかっていました。にもかかわらず、2000 年 11 月 3 日に 7 年ぶりに福澤杯を観戦しに行つたとき、かつてお世話になった先輩方が『消えていた奴が戻ってきたな！』と憶えていて下さったのです。ある先輩に『よく憶えていて下さいましたね』と言うと、『だってお前、勝ち過ぎていただろう』という返事が返ってきました。自分で言うのも変ですが、現役時代出場したオープン大会はホノルル市長杯 (2 位) を除き全て優勝したためだと思っています。

大会が終わってから『私は優勝（入賞）しなかったかもしれないけど、自分の言いたいことは言えたから後悔しない』と言う人がいるようですが、それは安っぽい負け惜しみです。

あなたは名もなき『その他大勢』で終わりたいのでしょうか？それとも THE Winning Speaker として名を残したいのでしょうか？

何としても優勝したい気持ちがないのに競技スピーチを続けるのは、学生生活の無駄です。競技スピーチはやめて、何か他に完全燃焼できることを見つけたほうが、それこそ『後悔しない』学生生活を送れるでしょう。

2. トピック選び：「何か書かなければならないから」書くのはやめよう

スピーチシーズンの最初を飾る ESS 内選考が近づき、チーフなどに『後期は何も書かないの？』と促され、急いで図書館へ行き、適当にタイムリーなトピックを選び、本で調べた内容をもとに当たり障りのない文章を書いてエリミネに出した。ESS 内選考及び大会の予選は何とか通過したが、本選では賞外に終わる。レセプションでその理由を審査員に聞いたところ、一言『Originalityがない』…そのような経験、思い当たる節はあるでしょうか？

もし思い当たる節があれば、トピックの選び方を最初から考え直してみてはいかがでしょう。

私が聞く限り、大学生が競技スピーチする話の多くは、既に新聞、テレビ、雑誌などで幾度となく取り上げられている問題に関するものです。図書館で得ることができる知識を単に羅列したところで、そのスピーチは他人の二番煎じに過ぎず、貴重な時間を割いて聞く価値はありません。学生は「斬新な」トピックを選んだつもりでいても、学生がアクセスできる情報源は大抵誰でもアクセスできるので、この世に「斬新な」トピックはないと考えた方がよいでしょう。

しかも、スピーチで取り上げられる問題の多くは、学生よりはるかに多くの経験、知識、実績を持った人達が何年もかけて取り組んでいるものだと思います。知識も経験も絶対的に不足している学生が、知識を並べ立てて『どうだ、よく知っているだろう』と自慢しても、聴衆の中の社会人にはつまらない背伸びとしか映らないでしょう。

それでは、どうすればよいのか？

皆さんには、自分が腹の底から喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、嘆くことができ、かつ社会全体にとっても重要性 (significanceともいいます)のあるトピックについて聴かせて頂きたい。

そして願わくは、そのトピックは大げさに言えば「自分とはどのような人間なのか、どこから来てどこへ行こうとしているのか」とつながったものであって欲しいものです。

ここで、私自身が2、3年生のとき発表した speech の背景を書いてみましょう。

私は1980年から1985年まで、父の転勤により合衆国はSouth Carolina州北東部にある人口2万人足らずの田舎町に住んでいました。South Carolinaは南北戦争では先陣を

切って合衆国から離脱し、ここ 20~30 年の大統領選挙では一貫して共和党が勝利してきた、アメリカの中でも保守的なことで有名な州です。日曜日にはほとんど全ての人がどこかの教会に通います。しかも、時の大統領は先日天に召された Ronald Reagan。『強いアメリカ』が盛んに叫ばれていた時代でした。

私が通っていた現地の公立小学校（アジア人は私の家族だけでした）では毎朝、朝礼の代わりに”Pledge of Allegiance”（合衆国国旗に忠誠を誓う儀式）が行われていました。6 年生になると、校長室にある校内放送のマイクを取って誓いの言葉を朗読する当番が回ってきます。私にも 2 回当番が回ってきて、校長先生から直々『朗読だけでよいから』と頼まれました。そこで私は、父と相談した上で『僕はアメリカにおらせてもらっている以上、合衆国国旗に敬意は払うし、起立、気をつけはします。しかし、僕は日本国民である以上、忠誠を誓うべき対象は日本国の国旗であって、合衆国国旗に忠誠を誓うわけにはいかないのです』と言って辞退を申し出ました。すると、校長先生は『なるほど、わかった』と理解してくれました。このような体験から、私は幼いときから「国家」「愛国心」「国防」といったことを強く意識するようになりました（実際、気象観測の現場見学と称してクラスで空軍基地に行ったことがあります）。

帰国したのは中学 2 年の夏休みでした。国防を議論すること、国旗を重んずることを（私の個人的印象ですが）「あつものに懲りてなますを吹く」ようにタブー視する気質には何となく違和感を覚えました。我々の先祖があの 15 年戦争で犯した数多くの罪について多少なりとも学ぶことでその原因を理解することはできましたが、私としては『犯した罪を悔い改めることと、現に日本国内に住み、危険に晒されている人々を守る責務とは次元の違う話ではないか？』という疑問を拭い去ることはできませんでした。そこへ第一次湾岸戦争が勃発し、日本のマスコミが（私から見れば）アラブ一辺倒になっているのが納得できず発表したのが、天野杯で発表した *The Misinterpreted Foundation* というスピーチでした。

その翌年の 1992 年夏、参議院議員選挙が行われました。安全保障の問題がかなりホットに議論されていたにもかかわらず、投票率はたったの 50.2%。『自民党政権が右翼化している、自民党政治には期待できない、とあれだけ叫びながら、投票という正式な形で抗議しないとは弱虫な！（白票を投ずることで、どの候補も駄目！という意思表示をする自由もあるのです）』という、納得できない思いから発表したのが、3 年後期の *The Blue Bird* でした。

いずれのスピーチも、一部の審査員からはかなり嫌われました。*The Blue Bird*について『政治の現場を「足」で歩いたこともないのに、そのような話をする資格があるのか？』と言われた審査員もいました。傾聴すべき一つの考えでしょう。ただ、自分が「足」で体験することだけが「体験」だ、というのは少し狭い考え方のような気もします。人間には想像力という高等な能力が与えられているのです。要は『自分が腹の底から憤り、悲しみ、嘆くことができるか』ではないでしょうか？

もっとも、自分にとっては憤りを感じる事柄であっても、社会全体にとって大した Significanceがない場合には、そのトピックについてスピーチを聞く価値はありません。

そこで、自分が話そうとしている内容をスピーチにする前に、一度”So what?”『それがどうしたと言うんだ？』と冷や水をかけてみることをお勧めします。”So what?”に対する反論ができないのであれば、そのトピックはスピーチにしないのが得策でしょう。

3. Main Claim (イイタイコト): 自分の主張を一言で要約できるか ?

さて、語りたいトピックが決まりました。あれも言いたい、これも言ってみたい、という気持ちになるのは無理ないことです。しかし、Presentation Time は通常 7~8 分、あれもこれも盛り込もうとするとタイムオーバーで遮られてしまいます。

また聴衆席で聴いていると、A というトピックについて話しているように聞こえるのに、途中から B というトピックの話に変わってしまい、結局この人は何を伝えたいのか解らなくなることがたまにあります。

大会会場を出た後、聴衆の記憶はどんどん薄れていくのが普通かと思います。では何を憶えていて欲しいと思いますか ?

日本語の作文指導でも言われることかと思いますが、スピーチを書くときは最初にイイタイコト (Main claim) をはっきりさせましょう。そして、main claim は one sentence で要約できるようにしましょう。これができないと、皆さんのメッセージが聴衆の記憶に残らない可能性が高くなります。

4. 話を掘り下げる : 何が故 ?

トピック選びについて少し前に述べた通り、ESS の競技スピーチで扱われるトピックの多くは、既にあらゆるメディア等で幾度となく取り上げられ、その道のエクスパートが議論を重ねてきたものだと思います。スピーカーが『戦争反対』『福祉をもっと充実させよう』と月並みなことを言うだけでは、貴重な時間を割いてスピーチ大会会場に足を運び、話を聞くほどの価値はないといって良いでしょう。

唐突な話ですが、Global competition の時代にあって少しでもコストを削減したい企業が、なぜ学生の遊びごとであるスピーチ競技にスポンサーとして資金を提供してくれるのか、考えたことがあるでしょうか ?

スポンサー、そして社会全体がスピーカーに期待するのは、慣習 (因習) や利害にとらわれない自由な「発想」あるいは「視点」ではないかと思います。

その際、「常識を疑う」こと、そして「何が故？」を問うことを意識的にやってみて

頂きたい。

『ペットボトルはリサイクルしよう』…半ば常識化してきた感がありますが、ペットボトルのリサイクルには実は多くの落とし穴(再処理に必要な大量の化学薬品など)があることを、私は昨年ある大会の予選で一本のスピーチに接するまで認識していませんでした。残念ながら本選には進めなかったのですが、とても新鮮な視点が印象に残っています。

一方、昨年は三菱自動車リコール隠蔽事件やUFJ銀行調査妨害事件などの影響で「企業倫理」の大切さを訴えようとしたスピーチが何件か見られましたが、「そもそも企業は
何故倫理を重んじなければならないか」にまで踏み込んだスピーチにはお目にかかった記憶がありません。

どのようなトピックを扱う場合でも、「何故?」「そもそも」を踏まえて議論を展開しているスピーチとそうでないスピーチとでは、Originality と説得力に格段の差があると思います。なぜなら、「何故?」に対する答えは、いろいろな情報を参考にしつつも最終的には自分自身で悩み考え抜いて出すしかないからです。Originality をトピックやアプローチの斬新さと理解する人がいるかもしれません、最も求められているのはむしろ「思考の Originality」ではないかと私は思います。

5. 聴き手への心遣い：いかなるスピーチにも反対者あり

私の失敗談をひとつ紹介しましょう。

私が2年生の後期、天野杯で発表した *The Misinterpreted Foundation* というスピーチは、『日本は世界の平和と秩序を守るためにこそ憲法9条を改正し、シビリアン・コントロールを強化した上で正式な軍隊を持つべきだ』というものでした。その年(1991年)最も物議をかもしたスピーチと言って間違いないでしょう。『お前の考え方は間違っている!』と感情的に言ってきた人は一人や二人ではありません。今だからこそ言えますが、その年のスピーチチーフはそれ以降私を毛嫌いするようになりました。当時の私は今以上に血の気の盛んな人間だったので、そのような反応をする人を『見識が狭い! Freedom of speech の何たるかがわかっていない!』と片付けていました。

しかし、後々で冷静に考えてみると、私が発表したスピーチは日本の反軍感情の原因を分析はしていても、「戦争」「自衛隊」「国防」と聞いてだけで生理的に嫌悪感を催す感情に本当に配慮しているとは言い難いものでした。1945年3月10日の東京大空襲、原爆投下、そしてソ連軍による数々の残虐行為には触れても、わが国がかつて侵略、榨取した国々のことは全く触れていませんでした。中華人民共和国や韓国の人々が聴けば、きっと怒り心頭に達したことでしょう。

そこで、3年生のとき発表した *The Blue Bird* では、選挙に行きたくない人の気持ちを極力汲み取ろうと試みました。『自民党政権の長期化で腐敗した政治を私などに変えら

れっこない、投票したって何の意味もない、と思う気持ちはよくわかる。僕だってそういうことがある。でも、できない理由はない。有権者の怒りが汚職大統領を罷免に追い込んだ実例だってあるのだ。だから、やってみよう。我々がやらなければ、誰も代わりにやってくれないよ』というメッセージにしてみました。天野杯の教訓を活かそうとしたわけです。

自分が語る内容に反対する人は一人もいないだろう、と考えるのは、たとえ無意識でも傲慢以外の何物でもありません。

どのようなトピックで、いかなる内容のメッセージを語っても、主張そのものに反対する人、または議論のある部分に異議を唱える人は聴衆（審査員を含む）の中に必ずいます。Q&A を経験したことのある人は、ひしひしと感じたことでしょう。スピーチは聴衆一人一人の心に向けて語ってこそ成立するもの。7~8 分間という時間制限の中で全ての人を説得するのは無理かもしれません、反対の意見を持つ人がなぜ反対するのかを十分に理解し、反対者の感情に配慮するのはスピーカーとして最低限のマナーだと思います。聴衆の貴重な時間を頂いているスピーカーに、聴き手をその考え方故に攻撃する権利などないはずです。物議をかもしやすいトピック、聴衆を二分しやすいトピック（例：国防、ジェンダー）について語るときは、特に注意が必要です。

『君の意見には賛成できないが、言わんとすることは解るし、僕のことを配慮してくれるのは嬉しい』 …”agree to disagree”（意見の違いを認め合い、受け容れる）の精神を作り出してこそ、Great Communicatorではないでしょうか。その上で、反対者も含めた全ての人の益となる提案を行うことができれば、極めてパワフルなスピーチになるでしょう。

そのためには、普段の活動の中でお互いのスピーチを吟味し、反対の立場から異論をぶつけ合い、議論の弱いところを徹底的に洗い出す訓練が不可欠です。Debate Section の人に自分の議論の弱点を洗い出してもらうのは素晴らしいことだと思います。Debate を実際にやってみるのも良い経験になると思います（そこで Debate にはまってしまい、Debate でもスピーチでも優勝できずに終わる人もいるようなので、注意は必要ですが）

自分の考え方が常に正しいとは限らない、反対の考え方を持つ人は必ずいる、反対の人をも味方につけよう…そのような謙虚な姿勢でスピーチ創りに取り組む人こそ、聴衆の支持を集め、結局勝つことができるのではないでしょうか。

6. 話し方：軽んずるなれ、Articulation と English Check

私は昨年、あるメジャーな大会の予選審査を担当しました。42 人もの選手が提出したスピーチ録音を聴き、かつ原稿を読みました。私は原稿を見る前にテープを聞く主義ですが（理由は追って説明します）話し方がモゴモゴしているため、またマイクの使

い方に慣れていないためか話そのものが大変聞き取りにくいスピーチが何本もありました。

「スピーチ大会と作文コンクールとは違う」…この当たり前の事実を、皆さんはどうだけ認識されているでしょうか？

スピーチとは本来文字面を読むものではなく、耳で聴き、目でスピーカーの表情と熱意を感じ取るもののはずです。とすれば、話が聴覚的に聞き取りづらい（すなわち Articulation がよくない）ようではスピーチとして成立しないはずです。私が審査を行うとき、Articulation のよくないスピーチに対して低い評価を下すのはこのためです。

発声、特に Articulation にはくれぐれも気をつけましょう。中学または高校で演劇部や合唱部に属していた方なら、「あ、え、い、う、え、お、あ、お」の発声練習や腹式呼吸の練習をされたかと思います（かくいう私も、中学と高校は合唱部でした）。ESS に Drama Section があれば、Drama の人の協力を仰いでみると良いと思います。Drama Section がない場合、以前演劇や声楽（合唱、独唱を問わず）をやった人がいれば是非知恵を借りると良いでしょう。私が属していた ESS の先輩に「カラオケで英語の歌を歌うこと」を勧めている人がいましたが、それも一つの良いアイディアだと思います。

また、前述のメジャー大会でさえ原稿に初步的な文法ミス（例：主語が複数形なのに動詞が単数形）やスペリングミス（例：“whether”を”weather”と書き間違える）が目立つのには唖然とします。スペリングミスは、日本語で言えば誤字、脱字と同じくらい読み手に対して失礼なものです。

原稿を出す前に、英語を国語とする人の English check を受けることを強くお勧めします。ESS に native speaker の顧問がおられない場合、皆さんのが普段英語の授業を教わっている native speaker の先生にお願いしてみるのも一案です。私が見た限り、プロの英語教師であれば、ESS 学生の正しい英語を身につけようとする自発的な努力には喜んで協力してくれると思います。但し、それなりに忙しい方々なので、時間には十分余裕を持ってお願いするようにしましょう。

以上、競技スピーチを極めるにあたり私が特に重要と考える点について、気がつくままに記してみました。何らかの参考になれば幸いです。あくまで一個人の考えに過ぎませんので、なるべく多くの人の意見を聞いてみることをお勧めします。

スピーチとは、知識、論理、語彙、音声、表情、感情、その他人間が持つあらゆる能力や感覚を総動員して、聴き手の「知、理、情」に訴える総合芸術だと思います。壇上で問われるのは単に文章がうまくまとまっているか否か、英語が上手か否かだけではありません。スピーカーの対人共感性、自らのメッセージに対する強い確信、他者に対する愛情、ひいてはその人の人間性、生き方そのものが問われていると思います。

特に、現在地球で最も広く使われている英語で競技スピーチを行うことは、国籍、母国語、民族の垣根を越えて人々の生き方、考え方、ひいては社会、国家、世界のあり方に影響を及ぼすことのできる数少ない活動だと思います。皆さんが携わっている活動の重要性を十分認識しつつ、使命感と気概を持って壇上で完全燃焼されることを期待します。

何かお手伝いできることがあれば、またこの文章に対し質問、意見があれば、いつでもご連絡下さい。スケジュールの許す限りお答えできればと思います。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。二度と繰り返されない皆さん的学生生活を、神様が豊かに祝福し導かれますように。

2005年1月4日

中桐 兵衛